

藤田貞一郎先生を追慕する

宇佐美英機

同志社大学名誉教授・経済学博士の藤田貞一郎先生は、二〇一五年六月一三日、不帰の客となられた。ここ数年は、脳梗塞の後遺症による障害を患いながらも、日々の読書とリハビリに励まれていた。体調の良い時には研究会にも姿を見せられ、弛むことなく論文や書評の執筆をされていたので、急逝の報せを今もって冷静に受け入れることができな

^{〔注〕}

いでいる。先生は、一九三四年二月に朝鮮平壤にて呱呱の声をあげられ、新義州にて幼年時代を過ごされた。生家は時計・宝飾・楽器店を営んでおられたよう

で、一九三八年版の『新義州商工案内』によれば、「藤田商会時計部・藤田商会楽器部」は常磐町九番地にあり、支店は鎮南浦三和町にあつたと記されている。当地では二番目に大きな時計・宝飾・楽器店であつたことも営業税額から判明する。しかし、第二次世界大戦の敗戦にともない、新義州から日本に引き揚げることとなった。先生はご母堂とともに徒歩で三八度線を越えて来たが、途中で略奪者に襲われるとか、危険な目に遭うということとはなかったと、生前に話されていた。また、古山高麗雄の『小さな市街図』という小説が新義州を舞台にしていることもあつて、その中に書かれている建物や風景を懐かしがっておられた。

帰国後は大阪府泉南郡淡輪に住まいされ、長じて一九五

四年に和歌山大学経済学部に進学された。和歌山大学では、安藤精一先生のもとで経済史の指導をうけられた後、一九五八年に大阪大学大学院経済学研究科へ進学されて、宮本又次先生の門下生となられた。大学院進学に際しては、東北大学で中村吉治先生の指導を仰ぐとも考えられたそうだが、安藤先生の助言にしたがって大阪大学に進学することに決められたことである。一九六三年に博士課程を終えられ、松山商科大学経済学部講師・助教授としてお勤めの後、一九六八年に同志社大学商学部助教授に転任され、二〇〇五年三月に定年退職を迎えられ、名誉教授となられた。

先生のご研究は、近世経済思想に関わる文献の渉猟と一次史料の発掘から出発された。この成果は、後に『近世経済思想の研究―「国益」思想と幕藩体制―』（吉川弘文館、一九六六年）として公刊され、同書により一九六七年に経済学博士の学位を得られた。この著作の研究史上の最大の功績は、近世社会に「御救」と「国益」の思想を見いだし、経済史の問題として初めて位置づけたことである。しかし、この著作は必ずしも評価されたわけではなかった。当時の学界は紋切り型の階級闘争史観が全盛であり、そのなかで

公にされた著書は、「近代化論」だという批評や領主階級の「御救」政策を評価しないという、概念先行の分析方法に固執する研究者の批判に晒されたのである。しかし、先生は、このような評価に屈することなく、地道に各地で近世史料を博搜されるとともに、明治期の「建白書」をも読み込みながら、日本における「国益」思想の成立と展開のあり方を追求され、知見を論文にされていった。

先生の研究が日本近世史で注目されるようになるのは、著書公刊から二〇年後のことであった。それは、近世社会における「仁政」イデオロギーが高く評価され始めるようになったからであり、ようやくに近世史研究が先駆的業績に追いついたといえる。その際、先生の研究を端的、古典的研究だと指摘する者もみられたが、本末転倒のとらえ方だと、私はそれらの発言を受け取っていた。近世史研究者が国益思想に注目するようになり、その思想が社会のどの階層やどのような関係性から成立するのか、という点で藩国家の枠組みを重視した先生と民間社会での自生的な生長を重視する研究者と見解の相違はあったが、いまだ結論が出ていないわけではなく、先生が切り開かれた研究がこれからも深化することは疑いを容れないだろう。このように

議論が活性化したことを、先生は心から喜ばれていた。それはともあれ、先生の息の長い研究は、改めて『国益思想の系譜と展開―徳川期から明治期への歩み―』（清文堂、一九九八年）にまとめられたが、後学の者にとって指針となる作品であった。

また、先生の研究のもう一つの柱は、生鮮食料品市場と同業組合の歴史を交差させて史実を解釈することであった。中央卸売市場・公設市場を制度的に明らかにし、同時に同業組合との関係性を説くという斬新な視点を近代経済史研究に提示されている。これらの成果は、『近代生鮮食料品市場の史的研究―中央卸売市場をめぐって―』（清文堂、一九七二年）、『近代日本同業組合史論』（清文堂、一九九五年）として江湖に問われた。そして、二つの研究の柱となったテーマを『近代日本経済史研究の新視角―国益思想・市場・同業組合・ロビンソン漂流記―』（清文堂、二〇〇三年）としてまとめられている。

とりわけ生鮮食料品市場・公設市場の歴史に関わっては、一九八四年に「市場史研究会」を中村勝先生とともに立ち上げ、初代の代表世話人として斯学の発展と後学の研究者の育成に尽力されたことも特筆されることである。会誌の

創刊号（一九八五年）には、「一般的な概念規定を先行させるのではなく、ひろく歴史的な生活実態の検討のなかから共通の研究基盤を形成し得るといふ立場をとりたい」と記されているが、実証を重んじられた先生の姿を彷彿させる言葉である。処女作から一貫して概念先行の分析方法に対して警鐘を鳴らし続けた表白といえよう。

先生が「これが最後の学会への出席」だと、病軀を押して参加されたのは二〇一四年一〇月二五日に開催された市場史研究会第六二回大会（於・滋賀大学経済学部）であったが、その夜の懇親会にも出席され、会員の前で現在進めている研究と今後の抱負を述べられていた。それゆえ、当日に出席していた者にとって、先生の訃報は驚天動地のことであった。しかし、後にご家族からお伺いしたところによると、先生がその日に外出されたのは奇跡的なことで、とても出かけられる状態ではなかったそうである。おそらく先生は、ご自身が手塩にかけて育て上げた市場史研究会であるがゆえに、会員の諸氏に最後の別れを告げる覚悟でお越しになったのではないかと、今更ながらではあるが痛惜に堪えない。

ところで、史料と格闘する中で研究者としての力量を高

めるといふのは、先生が自ら率先して私たちを導く教育方針であった。歴史学は史料をどのように解釈するか、視点を変えた時にはどのような結論が可能なのか、複眼的に、また長い時間軸でとらえることが重要なのだということ論文で示された。それゆえ、新しい史料に触れることができる機会となる自治体編纂事業や行政からの調査依頼も決して断ることなく引き受けられた。学術的に得られた知見を市民に平易に還元するということが、研究者の社会貢献の一環だとすれば、研究書以外の執筆にも注力された姿も思い起こされる。

先生が編纂・執筆に関わられた自治体史には、大阪府泉南市史、和歌山県田辺市史、滋賀県八日市市史・新修大津市史・五個荘町史などがあり、また大阪市や京都市の中央卸売市場史の執筆や『伏見酒造組合一二五年史』（伏見酒造組合、二〇〇一年）にも参画・執筆されている。さらには、『京都町触集成』全一五巻（岩波書店、一九八三―一九八九年）のうちの一卷も校正担当され、重責を担われた。

晩年の先生は、身体と発声に麻痺が残ったこともあって、外出は避けられるようになられ、リハビリに努められた。しかし、それ以外の時間には英独仏の新聞から始まり、多

くの原書・研究書に目を通される毎日であった。購入されていた書籍で未読のものを順序よく読み進められ、研究史のサーベイが不足していると思われる著作には、書評・論評の形で考えを公表され続けた。近年に至り書評や論評を執筆される際には、周辺にいる私を含めた教え子やご子息に対して、ご自身の批判の内容が的を射ているか、あるいは論理的に整合しているか確かめながら筆を進められていたように、いつも誠実な態度で研究に向き合っておられたことが印象深い。

先生が最後の書物として刊行されたのは、『領政改革』概念の提唱―訓詁学再考―』（清文堂、二〇一一年）であった。本書では「幕藩制」という学術用語で議論されることの問題点を指摘し、史料用語に即した研究を重視する立場を鮮明にされた。「藩政」は「領政」であるべきこと、史料にこだわることなどが強調されている。同書では、「領政改革」概念の提唱（一章）・近代日本臣民国家の成立（二章）・訓詁学再考（三章）・近世城下町の生鮮食品市場（四章）・明治前期「国益」思想追跡行の一里塚（五章）という章題を立てられたことでも明らかのように、先生が生涯にわたって論及されてきたテーマが網羅されている。第

一章は書名と同じなのだが、その副題が「近代日本国民国家形成史の一齣」とあるように、先生は近代日本国家の形成史に強く惹かれておられた。日本が国民国家ではなく、臣民国家として成立したとらえ、史料用語にこだわりながら歴史の推移を明らかにすることを強調されるようになった。

先生が執筆された最後の作品は、奇しくも本誌一八号に掲載された瀨瀬厚『日本降伏―迷走する戦争指導の果てに―』の書評であった。晩年に日本の戦争と近代天皇制国家体制を説明することにこだわられたのは、自らが三八度線を徒歩で越えられ帰国したという原体験によるのではないかと私は推測しているが、今となっては何うことは叶わないのが残念である。また、ご自身が提唱された分析視角が、これからの研究において、どのように評価されるのか自ら確かめることもできなくなりました。

しかし、先生は生前に語りたかったことのほとんどは活字にされた。再度、近世史研究に取り組み意欲をお持ちであったが、最後の著作を出される時に、「言いたいことは、みな書いたから」と仰っていたので、心残りは余りなかったと信じていた。

四〇年以上も先生の近くで過ごさせていただいたが、この間、先生が他人を誹る言葉を口にされることを一度も見ただことはなかった。決して悪口を仰ることはなく、この姿勢は生涯を通して守られた。このように謹厳実直な先生ではあったが、ご家族のこともいつも心に留めておられた。

「退職したら家内に採譜してもらって、全国に残っている古い唄を集めたい」と仰っていた。ピアノに堪能な奥様と、歌うことが好きであった先生らしいなあと、思ったものである。奥様も先生の後を追うように二ヶ月後に黄泉路に旅立たれたが、先生の夢のお手伝いに行かれたのだろうか、私は自分を納得させている。

また、スペインへ旅行された時には、真つ先にお嬢様へのお土産を購入されたことと伺ったこともある。「忘れたらあかんと思ったから」というのが理由だったそうであるが、せっかちだった先生らしい。ご子息が研究者となられたこともあって、時々にご子息の論文が掲載されている雑誌や抜き刷りを渡され、「一度読んで感想を聞かせて」というご依頼もしばしばあった。門外漢の専門分野なので、これにはいささか困ったものである。近年は外国に住む二人のお孫さんの成長を楽しみにしていて、会いに行くことや日

本に來られる時を心待ちにしておられた。病に襲われた後に、「もう飛行機には乗れんから」と悲しい顔をされた時は胸が詰まった。

社会的立場の弱い者に心を寄せ、学問を愛し、学生を愛し、家族を愛し、お元気な時には「我なお斗酒を辞せず」と仰つて駄洒落も飛ばされていた先生と席をともにすることは、もはや叶わなくなったのが淋しい。今はただご冥福を祈るばかりである。

〔注〕 戸籍上の一九三五年二月ではなく、ここでは晩年の藤田貞一郎先生のご意向に従い本来の生年月を記す。

(うさみ ひでき・滋賀大学経済学部教授)